

ラテンアメリカ文学に触れよう ～『夜のみだらな鳥』書評を添えて～

2018年10月12日

文学部2年 春日井敬介

作品紹介

ホセ・ドノソ 『夜のみだらな鳥』

あらすじ

望まれない畸形児“ボーイ”の養育を託された名家の秘書ウンベルトは、宿痾の胃病で病み衰え、使用人たちが余生を過ごす修道院へと送られる。尼僧、老婆、そして孤児たちとともに暮しながら、ウンベルトは聾啞の“ムディート”の仮面をつけ、悪夢のような自身の伝記を語り始める…。延々と続く独白のなかで人格は崩壊し、自己と他者、現実と妄想、歴史と神話、論理と非論理の対立が混じり合う語りの奔流となる。『百年の孤独』と双璧をなすラテンアメリカ文学の最高傑作。

著者紹介

1924年、チリのサンティアゴのブルジョア家庭に生まれる。1945年から46年までパタゴニアを放浪した後、1949年からプリンストン大学で英米文学を研究。帰国後、教鞭を取る傍ら創作に従事し、1958年、長編小説『戴冠』で成功を収める。1964年にチリを出国した後、約十七年にわたって、メキシコ、アメリカ合衆国、ポルトガル、スペインの各地を転々としながら小説を書き続けた。1981年にピノチェト軍事政権下のチリに帰国、1990年には国民文学賞を受けた。1996年、サンティアゴにて没。

(あらすじ,著者紹介:ホセ・ドノソ『夜のみだらな鳥』鼓直訳,水声社,2018年2月)

ラテンアメリカ文学のあれこれ

① 略年表ほか (※別紙参照)

② 魔術的リアリズムとは?

「ポストモダンの芸術的表現であり、文学では、従来のリアリズムの物語の形式をとりながら、そこに奇妙な要素や超自然の要素が盛りこまれ、読者にフィクションを取り囲む現実の再評価を強いる」(『世界文学大図鑑』,p343)

→近代リアリズム文学へのアンチテーゼとしての性格を持つ。

「現代世界では多くの社会において、西欧科学と論理性に規定された合理主義的視点が支配的であるが、魔術的リアリズムはこれを打破、超越しようとする」(『魔術的リアリズム—二〇世紀のラテンアメリカ小説(水声文庫)』,p128)

「非日常的視点を個人レベルにとどめるのではなく、それを集団レベルに拡大し、一つの「共同体」を構築する(中略)。元来は個人的狂気として驚愕とともに迎えられるべき要素が、疫病のように構成員全員に感染すると、最終的には何の違和感も引き起こさなくなる」(同上,p129)

→合理主義としての近代を打破する側面が強い。文学における共同体全体に非合理、非日常を蔓延させることでその実現を図る。

「「異常」が「普通」と化した世界を作ること、日常世界の「普通」が「普通」に見えないようにするのだ。小説内に描かれた(一見すると)常軌を逸した事件は、象徴的に現実世界を照射し、普通には見えない現実世界の隠れた側面を明らかにする。魔術的リアリズムは、この意味でやはり「リアリズム」なのである」(同上,p129-130)

→あくまで現実世界を描ききるリアリズムの一形態であり、現実世界あつての文学という姿勢は崩さない。

「魔術的リアリズムの作家たちは、現実世界を別の角度から照射することでその欠陥を浮かび上がらせ、そこから間接的に社会変革に寄与しようとする」(同上,p130)

→現実世界に対しての実践的、革新的な性格を伴う。

補) 日本における魔術的リアリズム(っぽい)作品

安部公房『密会』他

大江健三郎『同時代ゲーム』他

中上健次『千年の愉楽』他

筒井康隆『愛のひだりがわ』他

村上春樹『ねじまき島クロニクル』他

森見登美彦『ペンギン・ハイウェイ』『夜は短し歩けよ乙女』他

石井遊佳『百年泥』

など、他多数

(参考 Wikipedia「マジックリアリズム」)

③ ラテンアメリカ小説十本! (木村榮一『ラテンアメリカ十大小説』を一部参考)

ホルヘ・ルイス・ボルヘス『伝奇集』岩波文庫 1993年 (『エル・アレフ』)

アレホ・カルペンティエル『失われた足跡』岩波文庫 2014年

フリオ・コルタサル『遊戯の終わり』岩波文庫 2012年 (『石蹴り遊び』)

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』新潮社 2006年

カルロス・フエンテス『澄みわたる大地』(『テラ・ノストラ』) 現代企画室 2012年

マリオ・バルガス＝リョサ『楽園への道』河出文庫 2017年 (『緑の家』)

ホセ・ドノソ『夜のみだらな鳥』水声社 2018年

マヌエル・プイグ『蜘蛛女のキス』集英社文庫 2011年

イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』河出文庫 2017年

ロベルト・ボラーニョ『2666』白水社 2012年

(※木村榮一氏による選書ではボラーニョではなくアストゥリアス『大統領閣下』)

『夜のみだらな鳥』書評

・語りは一人称であるが、何かに変装しないと何者にもなれない人格崩壊の世界において、ウンベルトは次々と姿を変えるため通常の私小説とは視点の広がり異なる。

・台詞は鍵カッコの付いたものもあるが、多くは地の文で書かれている。これが見聞きした事を狂気のなかで反芻するようなウンベルトの不気味さ、ひいては作品全体の異様さを引き立てていた。また、ウンベルトの分裂症のような語りも相まって事実と虚構の判別がつかないようになっている。

・時系列が直線的でなく過去と現在が渾然とする局面もあり、作品の難解さを助長する一方で、カオスな雰囲気構築するのに貢献していた。また、時系列の乱れたカオスな作品であるからこそ、一つ一つの確かなエピソードが象徴的な意味を帯びていた。

・用済みとなった老婆でひしめく修道院と、畸形の者を幾千人も集めて作り上げた怪異(美醜の性質が合一され最大限まで高められたもの)の屋敷が舞台だが、これらが現実社会のパロディとして強烈なインパクトを持っていた(「権力の裏側」、「老いへの恐怖と若さへの嫉妬」、「グロテスクで露骨な階層構造」など)。

・寺尾は本作を「負の魔術的リアリズム」の作品だと評したが、『百年の孤独』を正方向の魔術的リアリズムとした場合、なるほど確かにこれは負の方向だ。物語の進行、形成を妨げるようなウンベルトの支離滅裂さ、小説の動力に逆らうその破壊行動が、結果的にカオスな世界を形成しており、負へ進むことで魔術的リアリズムの効果を生んでいるのだ。

・作品に漂う雰囲気は、ロートレアモンの散文詩を思わせた。少年時代をウルグアイで過ごしているあたり、ラテンアメリカの風土が放つ悪魔的なものが、彼を介してパリで変異、発露したのかもしれない(作者の伝記的事実と作品との直結はイケナイけど……)。

参考文献一覧

ホセ・ドノソ著、鼓直訳『夜のみだらな鳥』水声社 2018年

木村榮一『ラテンアメリカ十大小説』岩波新書 2011年

寺尾隆吉『ラテンアメリカ文学入門—ボルヘス、ガルシア・マルケスから新世代の旗手まで』中央公論新社 2016年

寺尾隆吉『魔術的リアリズム—二〇世紀のラテンアメリカ小説(水声文庫)』水声社 2012年

ジェイムズ・キャントンほか著、沼野充義監修、越前敏弥訳『世界文学大図鑑』三省堂 2017年

予告コーナー(こんなのやるかも…)

- ・今さらセカイ系(なんだかんだちゃんと消化してる人少くない?)
- ・メタフィクションの構造(『ファイアパンチ』か『冬の夜ひとりの旅人が』を取り上げつつ)
- ・妖精物語からSFへ(妖精物語から幻想文学そしてSFへと至る文学の一系譜を見ていきたい)
- ・作者と語り手の位置と距離について(ジュネットの物語論を参考に)
- ・マイナー本、発掘!(一部にカルト的人気を見せる作品を紹介 eg.J・ポトツキ『サラゴサ手稿』)
- ・読書会(青空文庫収録作家で。夢野久作、小泉八雲、カフカ、ポーあたり他、希望あればぜひ)